Kyoto University

昭和３８年度アフリカ調査計画案

1. 趣　　旨
2. 調 査 地 域
3. 調査班とその調査題目
4. 映画撮影班
5. 行 動 概 要
6. 所 要 経 費
附　　図

京都大学アフリカ研究会

Kyoto University

1. 趣　　旨

第二次大戦後の植民地独立の気運は、アジアからおこってアフリカに波及し１９６０年代に入ってからは、２０数ケ国が一挙に独立を獲得するにいたったこうした気運に応じて、近年、アフリカにたいする関心がとみに高まってきたが、日本国民のアフリカにかんする知識はヨーロッパやアジアの知識にくらべると、すこぶる貧弱である　それは、これまでアフリカ大陸が西欧先進諸国の植民地として、日本と自由な経済的ならびに外交的関係をむすぶことを、はばまれていたからである。こうした事情は、アフリカにかんする知識の不足という点ではマイナスであるが、私たちがアフリカの住民たちを政治的に支配したことも、経済的に搾取したこともないという点、いわば全く手をけがしていないという点では、むしろ将来的にはプラスというべきかもしれない。このプラス面を最大限に活用しながらマイナス面を克服し、日本と新興アフリカ諸国の友交と経済的協力を促進することを目的として、私たちはすでにアフリカの実態調査の経験をもつものを中核として同志をつのり、京都大学アフリカ研究会（略称ＫＵＡＲＡ）を結成するにいたった。（註）本会は以上の趣旨にもとづいてアフリカの自然と社会にかんする学術調査を行うと同時にそれを基礎として新興独立諸国の産業、医療、教育等の発展に協力することを念願としている

2. 調　査　地　域　タ　ン　ガ　ニ　イ　カ

京都大学においては、すでに２年前の昭和３６年１１月アフリカ類人猿学術調査隊をタンガニイカに派遣し、現在も４名の隊員が現地にあって調査活動中である。本研究会はこの調査隊のすでに切り開いた道にしたがい、現地においては両調査隊の協力一致こそが、おたがいの成果を高めるのみならず、ひいては今後の発展に役立つものであることを考え、あえて同一の地域をえらぶことにしたのである。

3. 調査班とその調査題目

本年度においては本会会員中つぎの四名を調査員として現地に派遣する。

(1)　浅　井　[redacted]　一　（６１才）

Kyoto University

略　　歴：昭4　京都大学医学部卒、医博
戦前、内蒙古の調査に参加、戦時中東南アジアにおいて医療活動に従事。
昭37　カンボジヤの医療視察
現在大阪逓遠病院長

調査題目：熱帯アフリカの住民の衛生状態並びにその対策にかんする調査

赤道直下にあるタンガニイカはマラリヤ、フイラリヤ等いわゆる熱帯病研究の最適地であることはもちろん、一方、性病、癩病、眼疾患等の発病率や乳幼児死亡率も高く、それらの衛生管理はほとんど放置され、典型的な低開発国的な衛生状態にある。

すでに昭和36年11月より京都大学アフリカ類人猿調査隊人類班が、エヤシ湖近傍に基地を設定、医博富川盛道隊員他1名が周辺の遊牧、狩猟採集族を中心に、東アフリカの人類学的調査をすすめるにさいし、その接近方法として医療活動と衛生調査を行い、住民の絶大な信頼をうることに成功している。

さらに、京都大学医学部精神医学教室医博高木隆郎が昭和37年10月、11月同基地を訪問、とくに医療活動の援助をなし、社会精神医学上の調査を促進した。

われわれは、医療活動がアフリカにおける未開人と接触し、かれらと提携するための最善の方法であると考える。したがって本活動を恒久化するための診療基地を現地に設定し、さらにわが国における一般アフリカ研究の足場ともしたい。

このための予備調査として、すでに大阪において30年の医療経験をつんだ浅井東一博士（外科学専攻）が現地におもむき、その資料を基礎として、将来の長期医療計画を立案する。

(2)　和　田　洋　一　（43才）

略　　歴：昭20、京都大学理学部卒
戦前内蒙古の調査に参加、戦後日本の農村調査に参加、現在ロンド会株式会社代表取締役、取材の試み研究京都大学人文科学研究所研究員（社会人類学）をかねる。

調査題目：中部タンガニイカの民族混淆地帯における近代化の調査、とくにその教育施設との関連において

中部タンガニイカ、エヤシ湖畔にはアフリカ類人猿学術調査隊の基地があって隊員は現在狩猟民族および遊牧民族の生活様式を調査中であるが、彼らの生活様式は日進月歩して、これらヘキ地の民といえども今日ではもはや裸体褐足のものをほとんど見ない状態にいたっている。今回はさらにこれらの民族と隣接した農耕民族の調査を加えることによって、生活様式の異なる民族間における生活近代化の相異を比較研究し、教育施設の相異との相関を求める一方、後進現地民にたいし、アンケートを用いてその欲求調査を試み、日本人による今後の精神的ならびに物質的援助の可能性を検討する。

(3)　谷　口　穣　（25才）

略　　歴：現在京都大学文学部二回生　　探検部部員

調査題目：タンガニイカ奥地における日本商品の市場調査

アフリカと日本との関係は表面上疎遠であり、日本人はアフリカのことを良く知らない。アフリカ人とてまた同様である。だが、表面上の疎遠さをよそに、発展する日本産業は、アフリカを市場として見落している訳ではないアフリカの現地人のまとう衣装の90%までは、実に日本からの輸出品に他ならないのである。これは衣類に限らない。しかし、輸出された商品が一体どこまで浸透し、いくらで売買されているかというような調査はほとんどなされていないといって過言ではない。これはまた日本人の手によって現在の時点において至急に行われねばならない有意義な調査であると思うので、本年度の調査テーマの一つに取上げることにしたのである。また、この調査の結果を、日本商品の輸出の進展に対する一助ともしたいのである。

(4)　端　信　行　（21才）

略　　歴：現在京都大学文学部二回生
京都大学探検部部員

調査題目：タンガニイカ湖における漁業の生態学的、社会学的調査

アフリカ第2位の面積をもつタンガニイカ湖の豊富な水産資源を、アフリカ人がいかなる形で捕獲利用し、それが彼らの経済生活、あるいは社会生活に対してどういう意味をもっているであろうか。これをもっと開発するには

Kyoto University

どうすればよいであろうか。アフリカ類人猿学術調査隊のカボゴ基地は、たまたまタンガニイカ湖畔にあり、調査隊員自身もまた彼らの蛋白源の大半をこれらの湖魚に依存している。カボゴ基地に滞在してこの問題を徹底的に調査し、より能率的な漁獲法ないしは加工法を導入することは現地民の福祉に関係があるばかりか、前進基地における日本人の生活を安定さすためにも必要である。

4. 映　画　撮　影　班

本会の目的は単に調査員を派遣して、調査に当らせるばかりでなく、アフリカ人に日本を紹介すると同時に日本人にたいしてアフリカを紹介することを急務と考えている　このため日本を紹介するパンフレット・スライド・16ミリフィルム等を挽行する以外に、映画撮影班をつくり、専門家を動員して優秀な映画の作成に当たらせることとした。映画撮影班の構成は演出1名撮影2名をもってし、その内の1名は本会会員河端繁をもってあてるが、あと2名は目下選考中である。

河　端　　繁　（29才）

略　　歴：東京写真大学卒業　日本映画技術協会会員
　　鈴木喜代治・関口敏雄・三木茂等諸技士の指導を受け、主に動植物の生態等自然科学記録映画に従事した

主な作品　〝昆虫の変態〟東京都映画コンクール金賞、〝飼いうさぎの生態〟
　　〝植物の成長〟他多数

5　行　動　概　要

＊調査隊員は本年6月1日羽田発、今10月31日羽田帰着の5ケ月間映画撮影班は同じく本年6月1日羽田発、明年3月31日羽田帰着の10ケ月間をもって行動期間とする。ただし演出者は初期の2ケ月間のみ行動をともにするものとする。

＊調査隊員は6月7月の2ケ月間はモシに集結して、スワヒリ語の学習にしたがう。

＊和崎・谷口隊員は、8月はエヤシ基地を中心として行動する。

＊浅井隊員は8月はカボゴ基地を中心として行動し、9月中旬より約1ケ月南アフリカを視察する。

＊和崎隊員は9月に入りカボゴ基地に移る。

＊端隊員は8月9月を通じカボゴ基地を中心として行動する。

＊調査隊員は10月中旬の定められた日にアルージヤに集結する。

＊映画撮影班の行動は別に定める。

6　所　要　経　費

（別　　紙）

Kyoto University

ＴＶ番組・フイルムドキユメンタリイ

「アフリカ通信　」（仮題）

（アフリカの太陽・アフリカの曙・その他）

Kyoto University

TV番組・フイルムドキユメンタリイ

「アフリカ通信」（仮題）

（アフリカの太陽・アフリカの瞳・その他）

（製作意図）

〃アフリカ〃と人は聞いて何を連想するだろうか。かつては、暗黒大陸、奴隷、猛獣、砂漠、風病 …… と、いずれも手もつけようもない程、深く暗い原始の世界の印象であつた。サマセツト・モームは、ヨーロツパの頽廃から脱出して、その原始の世界に於て神の啓示にふれようとさえした。アフリカは、神の姿が、まだ残つているのではないかと思われる程、大きいからだろう。

しかし、アフリカは、いかにも大きいけれど、今や、その観念を捨てなければならない。何故なら、そこには、われわれと同じく考える人間が、いきいきと活動していることを知つたからである。かれらは、ジヤングルと砂漠と悠久の大河の間にはさまれていながら、堂々と主張を始めた。そして、永い植民地政策の鎖をたち切つて、続々と独立国を確立しつゝある。

ところが、そこにはまだ人目にもふれず、静かに眠つている豊かな無限の地域もあるのだ。

アフリカは、現時点に於て、最も可能性を内蔵する大

Kyoto University

陸であると言える。しかも、この大陸は、日本人にとつては、まさに本の一頁をめくつたぐらいの知識しかないと言つてもよい。

しかしながら１９５８年以来すでに、京都大学学術調査隊は東アフリカ、タンガニイカ湖畔のカボゴと、エヤシ湖畔の~~カボゴ~~ニャセケを基地として、誠に地味ではあるが類人猿及び人類の調査を始めていたのである。五ケ年間にわたる調査活動の成果は、すでに、各界より脚光を浴びつゝある。そして、この基地は、将来日本とアフリカとを結びつける大きなカナメとなるに違いない。

１９６２年１２月更に、この調査隊を拡大して、KUARA(Kyoto University Africa Reserch Association)が結成され、１９６３年５月より、現地に赴き半永的に活躍することが決定された。

KuARAは、学術調査と併行して、テレビを通じて、日本人にアフリカを広くPR するために映画製作を企画した。

世界各地のテレビ・カメラルポは、すでに種々の形で放送されているが、それらは、生々しさを持たない「赤ゲット見てある記」的な上すべりなものばかりである。行きすがりの記念写真集では、われわれには、はねかえらず、感動を呼ばない。何故かと言えば、それらのロケ隊は、その土地の人たちと、連帯感を持ち得ない程、短期の取材であるからだろう。

KUARAは、アフリカに住みつき、土地の人たちと食事を共にし、その習俗の中に沈み込み、共に行動し、共に考え、世界の重みを知り、世界と共に栄えると言う考えのもとに、アフリカに拠点を置き、熱意と根気をもつて、取材をつゞけるのである。

KUARA調査隊の隊員の生活を中心として、その調査活動及び東アフリカ地域（ケニヤ、タンガニーカ、ウガンダ、ルアンダ、ウルンヂ）の自然景観、現地人の生活、新興独立国の現状等を、あらゆる角度から捕える。

現地に於ける録音も重視する。

そして、このフイルムは、真の日本人としての発展的な考えを、日本人に伝える感動的な「アフリカ通信」となることを確信している。

（主な内容）

①京都大学学術調査隊の活動、

カボゴ基地．エヤシ基地　他

②現地人の生活

クテインデガ族．カラモジヨン族．マンガテイ族．

Kyoto University

ツルカナ族．マサイ族．トングウエ族．チヤガ族．
ンブルー族　等

③ピグミー族と狩猟

④狩猟（スポーツとしての）

⑤アフリカの湖

タンガニーカ湖．エヤシ湖　他

⑥先史遺跡

オルドワイ遺跡．カゲラ遺跡

⑦大動物景観

サイ．カバ．ライオン．ゾオ．他多数

⑧植物大景観と小動物

カヨンザの森などの熱帯植物及び昆虫や小動物

⑨マウンテンゴリラ及チンパンヂーの生態

類人猿の生態とそれを調査する隊員

⑩東アフリカの医療

病気、その施設　マジックドクターなど

⑪発展する東アフリカ

独立国．産業．教育など

⑫東アフリカの外国人

白人．インド人．日本人

⑬東アフリカの山

キリマンヂエロ．ルーエンゾリ　他略

上記内容については今後更に検討に検討を重ね決定されるものであり、又特定の演出家によつて計画し、一応１３本（３０分もの）１クールとして編集するものとする。

（撮影班構成）

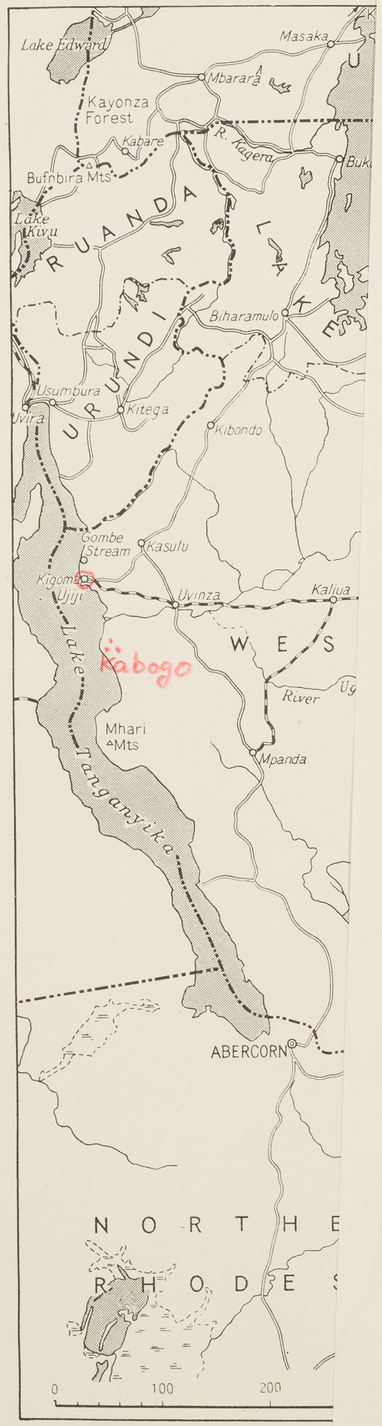
演出者１名　現地３ケ月間滞在

撮影者２名　現地10ケ月間滞在

撮影済みフイルムは逐次日本へ空送し、演出者が帰国後、ただちに編集を行う。更に現地滞在中の撮影者２名と密接な連絡をとり、後続の撮影を進行および構成する。撮影者２名は場合により２班に別れ取材し、演出者帰国後も期日迄取材活動を続行する。

脚本に関しては、知名人（例えば小田実）を現地に、或る期間招き、その后、現地との連絡によつて構成する。

Kyoto University



Kyoto University

検討を重ね決定され

て計画し、一応１３

するものとする。

送し、演出者が帰国

地滞在中の撮影者２

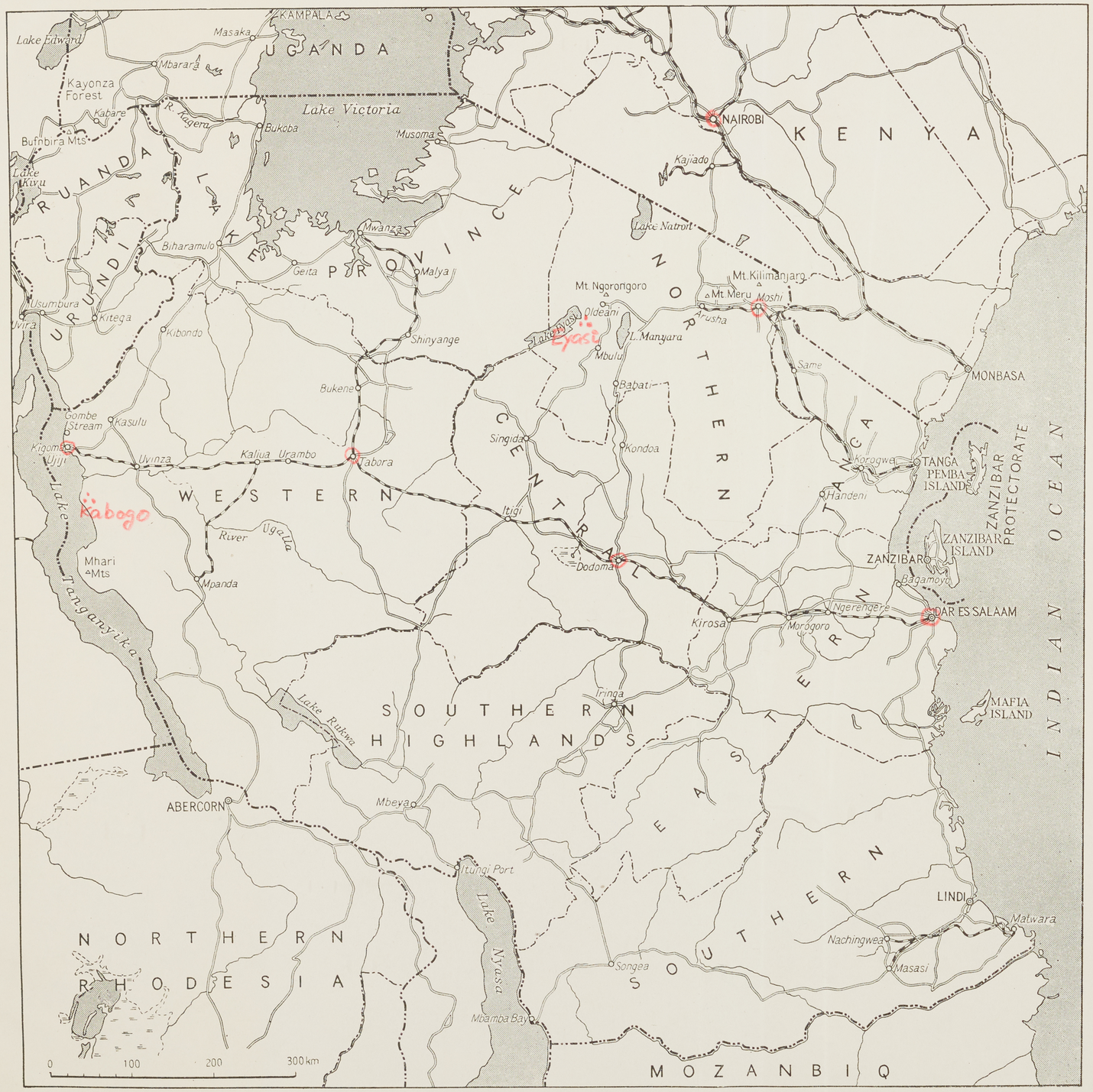
影を進行および構成

跡に別れ取材し、演

行する。

小田実）を現地に、

連絡によって構成す



TANGANYIKA TERRITORY

Kyoto University

Kyoto University